

## 表紙作品解説



### 山家遅日図 一幅

明治43年(1910) 65.5×37.0cm

紙本著色 跡見学園女子大学花蹊記念資料館蔵

山あいの清水の流れるかたわらに、ひっそりと茅屋がたたずんでいる。屋内には書見する人が描かれ、傍らに本が置かれている。

今は春、花は満開である。画中の人物が外に目をやると、そこには天に向かって花咲く桃の木と静かな池がある。水面には桃の姿が映り、花びらも舞い散っていたであろう、美しい景色が広がっている。

跡見花蹊は淡い色調の中に、幽玄な桃の里を見事に描き出している。

さらりと書き流したようでありながら、新緑を加えた木の表現の緻密さや、ごつごつとした岩肌と波打つ水の様子から徐々に遠方にかすんでいく描写の妙は、静と動を感じさせ味わい深い。

桃は古来より栽培され、桃の節句などで私たちになじみの深い植物である。別名で三千年草ともいい、三千年に一度花を咲かせ、不老不死の実を結ぶ西王母の伝説に由来している。更に中国ではこの世の理想郷を桃源郷と呼ぶ。

この作品は神秘的な桃源郷というよりも、花の香漂う懐かしい情景を思い起こさせる。「山家遅日図」は、跡見花蹊がおもう書画三昧の理想郷なのかもしれない。

写真提供：跡見学園女子大学花蹊記念資料館  
文：学芸員 渡辺 泉